

松井繁先生を偲んで

八木トミ

960-0102 福島市鎌田字赤沼21-3

松井先生との出会いは、福島県鏡石町で行われた日本白鳥の会研修会だったと思います。とても温和な会長さんだとお見受けしました。アホウドリ研究で有名な長谷川博先生の北極圏で繁殖するコハクチョウの営巣写真に魅せられ、又そんな遠方まで何故渡るのかと疑問でした。以来、各飛来地で開催される研修会に参加をし、会員の皆様との交流も深まりました。研究発表では青森県むつ市三上士郎先生のコハクチョウの嘴の見分け、岩手県北上市村瀬正夫夫妻のアメリカコハクチョウ一族の調査等、頭の下がる研究発表がありました。

年ごと女性会員も増え、華やいだ夕宴となりました。手造りのホタテが振まわれたり、カニ一匹お膳に乗ったりと開催地の方のお気持ちに感謝してご馳走になりました。横手のかまくら祭ではローソクの灯の幻想的な中甘酒の接待を受けた時、先生のお顔は童子以上にこやかでした。みやげ物の物色で遅刻したむつ湾では、恥じる私を笑顔で迎えてくださいました。楽しみは、先生を囲んでの二次会でした。会員のみやげ品に舌鼓、先生のトバと奥様心遣いのお菓子を食べ、夜遅くまでハクチョウ談議にふけりました。そんな時にもこやかにされ首を縦に振ってうなずいておいででした。

1992年6月、私の退職記念に北海道旅行をしました。仙台からフェリーで苫小牧に渡り、札幌の先生の自宅に直行しました。道路向いが病院で、現職医師の松井先生は白衣姿で見えられ、カキトウシの薬草茶を飲まれました。「毎日お茶替りに飲んでいきますのよ」と奥様。知人の庭で採取し乾燥させてお送りしたもので、まさか飲んでい

ただけるとは思っていなかつたことでした。夕食は市内の中華飯店でいただき、お二人の会話からも先生のお人柄が伺えました。ホテルの部屋まで送っていただき、翌朝は運転手さんが高速道路の滝川まで道案内、狩勝峠を越え然別湖へ、レンジャー崎野隆一郎氏とクマゲラの営巣を観察し、夜はシマフクロウの太鼓を打つような鳴声を聞きました。クッチャロ湖では山内昇氏と原生花園をめぐり、クロユリのじゅうたんを敷きつめたような湖畔を散策、春はハクチョウの集結地で何千羽がサハリンに向かって渡去するとのこと。予定外の礼文島に渡り、初対面の中村夫妻の出迎えで島内の桃岩山、トド岬をめぐり、6月なのに寒かったこと、ペンションも消灯と同時に天井に星座が浮かぶロマンチックな部屋でした。これらすべて松井先生ご夫妻のご配慮で、感謝しつつ幸せ一杯の記念旅行でした。

1989年2月の研修会で、アンドレ氏のサハリンの渡りコースの講演があり、機会があれば是非行ってみたいと思っておりました。1995年5月、白鳥の会会員有志がサハリンを訪れましたが、私は娘の結婚式のため涙をのんで断念しました。翌年主人とノグリキまで列車の旅に参加しました。

1997年7月、日本とロシア共同での調査計画があり、「八木さんもお夫妻でどうですか」と先生からのお電話で、調査隊のオブザーバーとして参加いたしました。

ロシア極東、サハ共和国、酷寒の地も7月は真夏でした。ヤクーツクの生物学研究所の専門研究員と日本人8名とロシア最大のレナ川を船で一昼夜下り、ビルイ川との合流点で停泊し、そこから小舟3隻に分乗して中州に渡り、ハクチョウの営巣を探索しました。いよいよ明日は迎いの飛行機が来る日、所長と3人で上陸した島内を蚊の大群に悩まされながら長時間歩き、疲れ切った身体にどしゃ降りの冷たい雨の洗礼でいや気がさしていた時、こんな所だと指差した彼方に1羽のハクチョウの優雅な姿を発見し、固い握手で喜び合いました。帰りを待っていてくださった皆様とは、山内昇氏持参のお酒で乾杯をしました。翌日ハクチョウを飛行機で陸に追い上げる予定でしたが作戦は失敗、川面を這うように飛び去ったのです。先生はこのロシア極東・レナ川の調査に参加を切望され、ご尽力されたのですが、体調が勝れず辞退されて私達夫婦に声をかけてくださったのです。

ハクチョウを愛し、自然保護を強調されていた松井先生は、今、蛇行するレナ川と群生するヤナギの桃源郷の上空を、純白のハクチョウの背に乗って北極圏へ旅立たれたと想像しています。

8年前の今日を思いおこし記しました。

2005年7月22日